

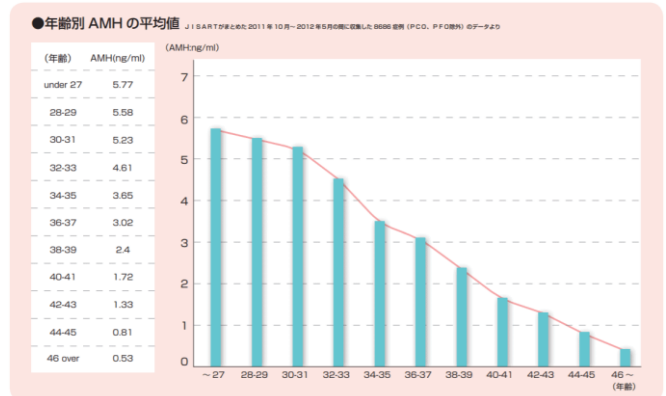


こちらの検査は、生殖医療機関が初診時に不妊症の要因やリスクを調べるために行うことの多い項目です。この検査だけで不妊症である、不妊症ではないと判定できるものではありません。また検査結果に問題があると必ずしも妊娠が難しいというわけではなく、逆にすべての検査に問題がなくても、パートナー側の要因や、ご年齢など様々な要因で不妊症となることもあります。それぞれの検査の意義を参考に、今回の結果をご自身のライフプランにお役立てください。

【AMH】 卵巣年齢を知る検査

AMH(アンチミュラー管ホルモン/Anti-Mullerianhormone)は、卵巣の予備能といわれています。わかりやすくいうと、『AMH 濃度から残存する卵胞の数を測定し、卵巣年齢が何歳くらいか推定する』ものです。AMH 低い場合、自然排卵が起こりにくだけでなく、不妊治療の際に卵胞が発育しないため不妊治療を断念せざるを得ないということもあります。また、多嚢胞性卵胞症候群があると AMH 値は高くなったり、ピルなどのホルモン剤内服中は低い傾向になるなど、体質や内服薬で数値が影響を受けることもあります。

AMH は卵子の「数」を評価するもので、卵子の「質」を評価するものではありません。AMH が低値でも自然妊娠することはもちろんあります。妊娠率には卵子の「質」も非常に重要であり、これは年齢の影響を強く受けます。AMHの値を知って、妊活のタイミングや、なかなか妊娠につながらないと感じる際には専門医受診を検討することが大切です。



【精子不動化抗体】 精子を攻撃して受精を妨げる

精子を攻撃する自己抗体です。血液検査でその存在が確認されますが、子宮頸管粘液～子宮腔内～卵管液、さらには卵胞液などの体液に存在し精子を不動化し死滅させてしまいます。このため、受精までのあらゆる過程で悪影響を及ぼし、卵子と精子の受精が妨げられるため不妊の原因として大変重要です。抗体価が低いと自然妊娠することも珍しくありません。しかし、抗体価が高いほど自然妊娠は難しくなり、人工授精や体外受精などの治療が必要となります。

【クラミジア抗体】 卵管閉塞により受精までのあらゆる過程を障害する

クラミジア IgA 抗体： 初感染と再感染時に上昇し、6 ヶ月で消失するため活動性抗体と呼ばれています。

クラミジア IgG 抗体： 感染後約 1 ヶ月後から上昇、数年間持続するため既往感染の指標となります。

女性がクラミジアに感染性しても2割くらいの人しか症状が出ません。その症状もおりものが増える程度です。そのため病院へ行かずに知らないうちに感染が進行します。卵管へ炎症を起こし、ひどい場合には骨盤腹膜炎、そして肝臓周囲へ広がっていきます。炎症が落ち着いた後には、卵管卵巣、卵管内に癒着を起こし、不妊、子宮外妊娠のリスクにつながります。これは一度起こると自然に治る事はありません。抗生剤の内服治療によりクラミジア感染は治癒しますが、癒着が消失したり改善することはないためです。。

クラミジアは男女間でお互いに感染させるいわゆる「ピンポン感染」があるため、両者の治療を同時に行うことが重要です。IgA が上昇している場合には抗生剤による治療をお勧めしています。IgG が上昇している場合には、過去の感染で卵管閉塞や癒着のリスクがあります、不妊症と感じた際には早めに生殖医療機関にご相談されることをお勧めいたします。

【甲状腺ホルモン】 正常な妊娠や胎児の発育を妨げる

女性は妊娠と同時に甲状腺ホルモンの必要量が増加し、不足した状態は流産のリスクが高まると言われています。甲状腺機能異常症は女性に多く、病気と診断する通常の基準値とは別に、妊娠した場合への変動に向けて妊娠希望女性の TSH を厳しく管理することがあります。この場合、TSH 正の上限は 3.9、下限は 2.5 と厳しく設定し、これ以外の場合には専門医への受診が勧められることもあります。また、母体からの甲状腺ホルモンは胎児の発達にも非常に大切で、妊娠初期に甲状腺機能低下症は子どもの発達に影響するとの報告があります。

【25-OH ビタミンD】 妊娠率に影響する栄養素

ビタミンDは腸からのカルシウムの吸収を促進し、骨の成長や健康に深く関与しているだけでなく、免疫やがん予防、生殖への影響といった多彩な働きをすることがわかっています。

ビタミンDの不足はがんのリスクを明らかに上昇させるという研究結果もあるほどです。生殖への影響では、十分なレベルのビタミンDを示すグループとビタミンD欠乏症を示したグループで約2倍の妊娠率の違いが示された報告や、採卵時の卵子獲得率、移植率などの不妊治療の結果についてもビタミンDが十分にあるグループでは有意に高かったと示す研究報告もでています。このようにビタミンDは妊娠の成立に大きく影響する因子と考えられていますので、低値であった方には積極的な摂取をお勧めしています。ビタミンDは、紫外線を浴びると体内で合成されるため、週に2回、5～30分程度の日光浴が推奨されています。また、食品では、魚類(かつお・まぐろ・あんこう、鮭)、キノコ(きくらげ・しいたけ)などに豊富です。

アメリカ内分泌学会では、妊娠中のビタミンD摂取は、 $37.5\mu\text{g}$ ～ $50\mu\text{g}$ を推奨していますが、日本人女性の1日平均摂取量はわずか $7.0\mu\text{g}$ といわれています。紫外線を浴びる日光浴や食事摂取だけでビタミンDを上昇させることはなかなか難しいのが実情です。このため、ビタミンDのサプリメントなどの活用を生活習慣に取り入れてみることもお勧めしています。



【感染症】 妊娠希望女性にとって重要な感染症

(梅毒) 性感染症の一種で、梅毒トレポネーマという細菌が粘膜から感染することによって起こる病気です。

近年の梅毒感染者は2010年代から増加し、2019年、2020年は減少したものの、2021年には再び増加、2022年には1万人を突破してしまい、社会問題にもなっています。妊婦が感染している状態だと、胎盤を通して胎児が感染する先天梅毒の原因になります。早産や死産、出産しても新生児に奇形が現れることがあり、妊娠を考える女性にとっては重要な感染症です。

(HIV) 女性がHIVに感染していても妊娠出産は可能ですが、将来の妊娠・出産の可能性を考慮した慎重な診療と治療方針の選択が望まれます。自然妊娠ではパートナーや、胎児へのリスクが生じます。男性、女性のどちらかがHIV陽性か又は双方とも陽性なのかによって、より安全な妊娠の方法は異なります。分娩に関しても、予定帝王切開とし母子感染を考慮し人工栄養を行う事により、赤ちゃんに感染しないように対策をとる(出産後は赤ちゃんにも一定期間抗HIV薬が必要)ことも必要です。HIV陽性妊婦の診療には産婦人科・小児科・内科その他の関連専門職がチームを組んで対応するなど、妊娠前からの対策が重要です。

こちらの検査は、不妊症を診断するものではありません。まずは、ご不明な点や、結果について詳しく医師からお聞きになりたい場合にはご予約をお取りしております。健診センターまでご連絡ください。

